

海外移住 資料館だより

日本人の海外移住は150年以上の歴史があります。JICA横浜 海外移住資料館では、海外へ移住し、それぞれの国や地域で新しい文明作りに参加してきた日本人移住者の歴史と、その子孫である日系人について広く理解を深めてもらうことを目的に、さまざまな資料を展示しています。

■発行元：JICA横浜 海外移住資料館
神奈川県横浜市中区新港2-3-1 JICA横浜2階
Tel:045-663-3257(代) URL: <https://www.jica.go.jp/jomm>
■編集発行人：JICA横浜 海外移住資料館 館長 熊谷晃子

ボリビア日本人移住120周年

INMIGRACIÓN JAPONESA A BOLIVIA



1899 **120** 2019
años



ボリビアに生きる日系人

—守りゆく伝統、見据える未来—



1928年当時の首都ラパスの日本人会 (在ボリビア日本大使館提供)

企画展示

ボリビア日本人移住120周年記念展示

ボリビアに生きる —日系人の生活とその心—

2019年11月2日(土)～2020年2月2日(日)
JICA横浜 海外移住資料館(企画展示室)

公開講座

日本人ボリビア移住120周年を迎えて
11月17日(日)14:00～15:30

講師 安仁屋 滋氏
(ボリビア日系協会連合会事務局長)

会場 JICA横浜 会議室1

入場無料・予約不要

ボリビア

日本人移民の足跡



アンデスを越えてボリビアへ

1899年にペルーへ到着した第一回移民790人。そのほとんどはサトウキビ畑での出稼ぎ労働者でした。日本で聞いていたよりもはるかに厳しい労働環境のなか、アマゾンのゴム景気の噂を聞きつけた93人は、4,000メートル級のアンデス山脈を越え、アマゾン源流をカヌーで下るといふ過酷な旅の末ボリビアへ入国。これが日本人ボリビア移住のはじまりとされています。ペルーからボリビアへの転住はしばらく続き、その多くはゴム集積地のベニ県リベラルタ方面へ向かいました。初期の日本人移民はほぼ男性だったので、現地の女性と結婚してボリビア社会に同化していきました。



1910年代にラパスで成功した
小森商会のシャツ工場 (1937年設立)

都市部への進出、戦争の影響

日本人移民の一部は、首都ラパスをはじめとした都市で働きはじめました。床屋や商店などで活躍した日本人移民は、やがて日本人会を結成します。成功者の中には、日本から花嫁を迎える者もあり、子どもには日本語教育を与えました。ボリビアとパラグアイとのチャコ戦争 (1932-35年) ではボリビア政府へ献金を行うなど、現地社会へ貢献していた日本人移民ですが、1941年に太平洋戦争が始まると、ボリビアの敵性国民としてアメリカへ強制連行されたりしました。

戦後の二大移住地 オキナワ・サンフアン

終戦後、アメリカ軍の統治下にあった沖縄では土地を失い路頭に迷う人が増え、それを知ったボリビア国内の沖縄出身者が働きかけて、ボリビア・アメリカ・琉球政府協力のもと、故郷沖縄の人々を受け入れた先がオキナワ移住地でした。また、日本の製糖業者西川利道率いる西川移民が基礎を築き、日本・ボリビア間協定による計画移住が行われた先がサンフアン移住地であり、この二つが戦後の二大日本人移住地となりました。入植当時 (1950年代中頃)、道路も電気もない南米のジャングルを開拓することは苦悩の連続で、多くの離脱者も出ましたが、苦境のなか移住者は協同組合を作り、協力して農業に励みました。1970年代に入ると経済発展を遂げた日本からの支援が本格化し、農業の機械化が進んだ結果、両移住地はボリビア有数の農業地帯となりました。



サンフアン移住地への道路開通工事



沖縄からの移住者を乗せ出航する船
(第17次移住団1963年3月)



ラパスの日本庭園で開催される「お祭り」

今なお続く、日本との絆

1980年代には戦後移住地の一世二世、1990年代には戦前移民の子孫を中心に日本への出稼ぎブームが起こり、日系社会の空洞化、日本との新たな交流という正負双方の影響が現れました。移住100年、110年、120年の節目の年には、皇室ご臨席で記念祭が行われています。ボリビアの日系人は、日本とのつながりを大切にしつつ、今を生きています。

移住地に生きる日系人

- 守りゆく伝統、見据える未来 -

オキナワ移住地

1954年から1986年までに沖縄出身の584家族・3,385人が移住。現在は移住地全人口の約7%にあたる約900人の日系人が暮らす。1998年に周辺の村落とあわせて行政区となり「オキナワ村」がボリビア政府から承認された。総面積111,378ha(沖縄本島よりやや小さい)のうち、約42%が日系人所有の農地。
*日系人数と面積は2019年9月現在、移住地人口は最新の2012年国勢調査による



家庭では白米と肉料理が中心。豊年祭や敬老会では沖縄そばやヤギ汁など沖縄料理を作る。日本食堂には太巻き寿司、てんぷら、ラーメンなどのメニューが並び



「伊藤食堂」「小田食堂」では長崎ちゃんぽんが、「味彩」ではザンギという北海道の郷土料理などが食べられる



サンファン移住地

1955年から1992年までに長崎、福岡、北海道などから302家族・1,684人が移住。現在は移住地全人口の約8%にあたる約720人の日系人が暮らす。1965年にサンファン村として、2001年には同市としてボリビア政府から認められた。総面積は27,132ha(千葉市とほぼ同じ)。
*日系人数と面積は2019年9月現在、移住地人口は最新の2012年国勢調査による



オキナワ診療所の医師は全員オキナワ移住地出身の日系人。24時間診療、救急にも対応している



70歳以上の日系人は105人。診療所内では平日2時間のリハビリ体操が、文化会館では月2回の予防型デイサービスが開催されている。元気な人が多く、最近できた介護用ショートステイ施設の利用者はほとんどいない
(写真提供:オキナワ日本ボリビア協会)



70歳以上の日系人は114人。2012年に高齢者の活動拠点「開拓者憩いの郷」が開館。生きがい教室やデイサービス、ゲートボールなどのレクリエーションを通じて健康づくりや集いの場を提供している。2013年には診療所の隣に日系高齢者ケアセンターが開設。ショートステイとデイケアサービスなど医療の視点で家族を支援している
(写真提供:在ボリビア日本大使館)



サンファン学園で行われる盆踊りには近隣のボリビア人も多数訪れる。婦人会が浴衣の着付けをしてくれる。焼きそばやお汁粉なども提供され、日本の食と文化の紹介に一役買っている
(写真提供:在ボリビア日本大使館)



学校の運動会や豊年祭にはエイサー、琉球国祭り太鼓、空手演舞等が、成人式の余興には沖縄角力(相撲)大会が行われる。学校で子どもたちは先生や地域の大人から三線やエイサーを習う
(写真提供:オキナワ日本ボリビア協会)



成人式では女性は振袖を着る。子どもの日には鯉のぼりが飾られ、敬老の日には子どもたちが日本の歌を歌う。地域の人々が亡くなると婦人会が集まり炊き出しも行われる。区ごとに回覧板や「お知らせ」があり、年1回ゴミ拾いキャンペーンも行われている



1965年設立のコロニア沖縄農牧総合協同組合(CAICO)は畑作(大豆、小麦等)、畜産、営農を支援。特に国際的な商品である大豆に力を入れ、加工工場を建設し、大豆加工品の80%を輸出している



サンファン診療所には内科、産婦人科、小児科などがある。2013年にはリハビリ専門施設もつくられた。移住地出身の日系人医師もいる



サンファン日本ボリビア協会が運営する「サンファン学園」。約20年前は全体の70~80%が日系児童・生徒で、日本語の授業は必修だったが、現在は25%と減少し、日本語の授業は選択制。公教育はスペイン語で行われている
(写真提供:在ボリビア日本大使館)



移住者の視点

受け継がれる伝統文化



安里 昇さん(左)・将貴さん(右)
1962年に家族と共にオキナワ移住地に入植。小さい頃から畑仕事を手伝い、農業一筋で子ども3人を育てる。長男の将貴さんは大学で経営学を学び、現在は家業を手伝っている。

入植時の移住地は雑草が大きく、家の周りは虫だらけで、まだ5歳だった私は毎日蚊に刺されて泣いていました。通学路の未整備など不便が多く、十分な義務教育を受けられませんでした。自分の子どもたちには十分な教育を与え、普段から沖縄の習慣、言葉などを伝えていきます。若い人々には感謝の気持ちを忘れずに持ってほしいです。(昇さん)

時間を守る、何事にも責任を持つなど日本人としての生き方や習慣を大切にしています。祖母が元気な頃はよく沖縄の話を楽しみました。好きなウチナーグチ(琉球語)は「いちゃりばちようで〜(一度会えばみな兄弟)」。尊敬する父の跡を継ぎ、農業の産業化に取り組みたいです。青年会では地域行事のサポートや後輩への指導などを行なっています。入植から65年、多くの苦労の末に今があるので、感謝の気持ちを忘れず伝統を引き継いでいきたいです。(将貴さん)

移住者の視点

移住地の課題



中村 侑史さん
1963年にオキナワ移住地に入植。農業の傍ら2000~2006年、2010~現在までオキナワ日本ボリビア協会会長を務める。

主力の農業は今やそれぞれが営農を確立し、一定の収入を確保できるようになりました。移住当初は中学校を出るのがやっとだった子どもの教育も、今はほとんどの家庭が大学まで出しています。

世代交代が進み二世、三世の時代ですが、大学を出て勤め人になるより、ここで農業を継ぐ方が収入がよいので、子どもたちは概ね移住地に残ります。畑の平均面積は300ha(東京ドーム約64個分)と広く、現地の人々よりも豊かな暮らしができるのです。その反面、せっかく大学で勉強してもまたオキナワ移住地に戻ってくると、ボリビア社会で活躍する日系人がいなくなるのではないかと、これがボリビア日系社会の大きな課題です。

オキナワ移住地の日系人は、移住地人口の1割にも満たないことからボリビア人との協調は大切です。平和で明るい移住地を維持するためにはこれが絶対必要なのです。

支援者の視点

日本語教育の現在



渡邊 萌奈さん(JICA日系社会青年ボランティア)
2019年3月から日本語教育隊員(短期)としてサンファン学園で活動中。担任は持たず日本語クラスを巡回。日系イベントにも積極的に参加している。

サンファン移住地では日本語や日本文化が大切に守られ、サンファン学園に通う日系児童たちも日本の教科書を使用して日本と同じ「国語」を学んでいます。同学園に通うボリビア人の児童たちも3年生から日本語の授業を選択することができます。

しかし、なぜ日本語を学ぶのかについて考えることは少なく、将来についても親の仕事以外のイメージを持っていない子どもが多いと思います。職業選択の幅を広げ、サンファンのさらなる発展につながる日本語の使い道の提案が必要だと考えています。

ある三世の人が、「日本の道徳観を持っているから現地の人に信頼され、お客さんを増やしている」と話しているのを聞いて、改めて日本語を残していく必要性を感じ、子どもたちにも「日本語、日本文化を学んで良かった」と感じられる体験をしてほしいと思っています。

支援者の視点

移住に学ぶ多文化共生



松本 仁さん(元JICA日系社会青年ボランティア)
1997~2000年、日系社会青年ボランティアの日本語教師隊員としてサンファン学園で活動。帰国後JICAに就職。中南米部計画・移住課長だった2015年にはサンファン移住地入植60周年記念式典にも参列。2018年よりJICAメキシコ事務所長。

サンファン移住地は家族や地域のつながりが強く、移住地全体が一つにまとまった大変居心地よい所でした。

故郷での厳しい生活から移住を決断した人たちのチャレンジ精神や、現地社会との共存と安定した生活を得るために伴った苦労、その結果として移住先の地域や国の経済社会開発に貢献した功績といったものは、現代日本の私たちに一見身近でないように思えるかもしれませんが、ですが、見方を変えれば、かつて移住した日本人の姿は、いまの日本で働く日系人や外国人の姿と大きく変わらないのではないのでしょうか。

いま日本に暮らす日系人や外国人が地域社会と共存して安定した生活を送ることは、彼らの生活向上だけでなく、地域や日本の経済社会の開発につながります。だからこそ私たちは、身近に暮らす日系人や外国人と共存共栄の社会を目指すべきだと思います。